

猿婿はなぜ殺されたのか ―水乞い型婿入り譚の再考察―

武笠俊一

【要旨】

代表的な昔話である猿婿入り譚については、柳田国男をはじめ様々な研究者が考察を行ってきた。しかし、いせんとして多くの問題が解明されていない。本稿は、未解明な問題点のいくつかを、社会学的な視点から分析しようとしたものである。

いわゆる異類婿入り譚には、柳田国男による芋環型と水乞い型、報恩型の三類型があり、また関敬吾による詳細な分類も行われている。柳田国男の分類は蛇婿入り譚に限定されたものだったが、いくつかの点で不備があり、この分類を異類婚姻譚全体に拡張した関の網羅的な分類にも無理がある。本稿では、対象を蛇と猿の婿入り譚に限定して、新しい分類を行った。

ここで提出した分類は、未婚の女性からみた異類の若者の結婚相手としての適格性を尺度としたものである。この分類を前提にして、猿を主人公とした水乞い型婿入り譚の、社会学的分析を試みた。

一、はじめに

小さな子どもが家族の枠を超えてより広い社会関係を持つと、それは、彼らが「社会」と出会ったことを意味する。より広く新しい体験の累積の中で彼らの社会観が、より抽象的に言えば世界観が形成されて行く訳だが、彼らの素朴で断片的な体験を小なりと言えど一つの世界観へと統合してゆくことも重要な手引きは、たいていの場合様々な神話・伝説や昔話、宗教説話などの口承文芸であった。それは、文字や書物が庶民

層に普及した後も、あるいは初等教育が一般化した現代社会においてもそれほど変化してはいないだろう。とりわけ日本人の多くは、豊富な昔話群を手引きとして、人間と社会関係の特質を理解し「社会」の存在を認識してきた。

ならば、我々の人格形成、人間観・世界観の形成の原初のものとして、昔話によって形成されてきた社会観を解明することは、日本人理解にとって今なお重要な作業であろう。本稿は、猿婿入り譚というよく知られた昔話を手がかりとした、日本の基層文化解明の試みである。

今日では昔話は、子どもたちの生活体験からまったく遊離した別世界の物語となってしまった。しかし、かつては、昔話の世界と村の子どもたちの日常生活との距離はわれわれが想像する以上に近いものであった。子どもたちはそれを遠い昔の、あるいは自分たちとは異なった世界の物語として聞いていたのではなく、ごく身近なそして自分たちの生活体験と密接な関係のあるものとして聞いていたと思われる。このことを逆に言えば、昔話の口承文芸としてのリアリティは、子どもたちの卑近な生活体験と共鳴することによって保たれていたのである。

二、民話研究への社会学的方法の適用

多種多様なおとぎ話の中から本稿では異類婚姻譚の一つである「猿婿入り譚」を取りあげたい。

異類婚姻譚は神婚譚と呼ばれることもある「本格説話」の一ジャンルで、人間と動物・神霊との間の婚姻を題材とする説話である。恋愛や結婚は、幼い子どもや若者にとっても大きな関心事であったろうから、どんな社会でも男女関係をあつかった説話は広く流布していた。しかし、こうした説話の中でも、人間同士のものではなく人と人ならざる者との婚姻譚の方が大きな比重を占めていた。実はこの種の説話の中でのみ、庶民の婚姻や男女関係は語り継がれてきたのである。

昔話は、一見われわれの现实生活とはまったく無縁な「お話」であるように見える。しかし、昔話の語らんとしたテーマには、実は庶民が日々直面していた日常生活の課題が反映していた。たとえば「猿婿入り譚」には、村人たちの結婚観が強烈に示されていた。われわれが今試みようとしているのは、昔話を庶民の日常生活の反映として分析しようとするアプローチである。それをわれわれは昔話の社会学的分析方法と考える。

三、異類婚姻譚とは何か

いわゆる口承文芸において、人間と人間以外の者との婚姻をあつかった物語は少なくない。研究者は、こうした説話群を相手が神なら「神人婚姻譚（神婚譚）」、精霊や動物などなら「異類婚姻譚」という名称で呼んできた。もっとも、日本においては神々と動物との境界は曖昧である

から、こうした分類はあまり重要ではない。例えば、蛇や亀は多くの場合神の化身と考えられてきた。本稿では神婚譚を特に区別せず異類婚姻譚の中に入れて考えてゆきたい。

異類婚姻譚が、婚姻説話のなかでどのような位置を占めているか、まずそのことを考えてみよう。

説話世界の婚姻譚は、両性の属性によって三つに分類できる。

- ① 人間以外のもの同士（山や川、湖、月や太陽、星など）
- ② 人間と人間以外の者（動物や神々）
- ③ 人間同士

婚姻はもっとも人間的なドラマであるが、右にあげた三種類の説話が見な等しく男女の心理の機微を扱っているわけではない。恋愛と婚姻の実相を示そうというテーマ意識は、実は①でも③でもなく②の異類婚姻譚にもっとも多く示されているのである。

①に属する説話の登場者たちは、人間とは隔絶した存在、つまり山や大地、河や湖などの自然物が擬人化されたものである。彼らは、もともとが自然物であるから、その結合と離別の物語も人間と同質の細やかな感情の動きを示すものではない。だからこうした説話のテーマは、天文地歴の創生や地名・名称の来歴を語るものであり、そこで語られている婚姻の成立や破綻は、自然物のなりたちや形状を説明するためのものであるに過ぎない。つまり、この類型の婚姻説話は、現実の男女関係のあり方を示すものではなかったのである。

③は人間同士の婚姻をあつかったものだが、実はこの種の説話は近代的な恋愛小説の読者が期待するようなラブ・ロマンスを主題としたもの

ではない。たとえば、「桃太郎」や「一寸法師」は物語の最後に美しい女性と結婚するが、話の内容は主人公の冒険譚でありロマンスが語られることはほとんどない。人間同士の婚姻をあつかう昔話では、「結婚の成就」は主人公が苦闘の末に手に入れた幸せの象徴的表現であり、男女の心理的機微は語り手の視野の外におかれている。たとえば「桃太郎」において、その主題は魔界征服譚であり恋自体はまったく語られていない。「三年寝太郎」では、例外的に男から女への働きかけをめぐって物語が進行し結婚にいたる。しかし、その内容は機知と策略に秀でた若者が幸せを手に入れようという、いわゆる頓智話に属するものであり、この説話も男女関係そのものをテーマとしたものとは言い難い。

このように、人間同士の婚姻をあつかった説話においては、恋愛そのものがテーマとなることはきわめて稀であった。それは、庶民の生活感覚では、純粹なロマンスは、特殊な人へのみ許されたものだという暗黙の前提があったからであろう。男なら人並みはずれた力や勇気を持つ英雄や神々に選ばれた特殊な人でなければならず、女なら類まれな容姿をもった人、あるいは特異な宿命に翻弄されたり英雄豪傑に強く愛された人であった。ごく普通の人々の恋は、もしそれが村の中で語られるなら、噂話か猥談以上にはなりえなかったのである。

口承文芸の世界では、ロマンスは必ずオルフェとユーディリアスのものであり、ロメオとジュリエットのものではなかった。庶民の恋愛や結婚が語り継がれるべき文芸となるためには、異類婚姻譚という様式に交換されることが必須の条件だったのである。

四、婿入り説話の分類の系譜

(一) 異類婚姻譚が示すもの

柳田国男は、異類婚姻譚を「神々の零落の後の物語」だと考えた¹⁾。例えば、代表的な婿入り譚の主人公である猿や蛇は、かつては人々に畏敬されるべき霊的存在だったと言っているのである。しかし、時代が下って彼らの神威が弱まると、彼らは畏敬される存在ではなくなり、昔話の中で人間にひどい目にあわされるまでに成り下がったという。それゆえ、柳田国男は、異類婚姻譚とは水の神がもはや畏怖する必要のない存在となったことを示すものだという。しかし、こうした歴史的变化についての柳田の見解は、昔話としての婿入り譚の存在意義の説明としては説得力あるものとは言い難い。

確かに、蛇婿入り譚を古代の三輪山伝承（ここでは、婿は本物の蛇であった）の後裔と見なすことは可能であろう。しかし昔話における蛇や猿と人間との交情を、古代の神々にたいする信仰の名残りとして理解することにどれほどの意義があるのか。当然ながら、動物説話の大部分は信仰とは無関係である。ならば、この種の説話もまた、いったんは信仰と切り離して理解すべきではなからうか。

動物説話はあらゆる文化に見られるが、それは一般には「寓話」というジャンルに属する。つまり、動物の姿をかりて人間世界の話をしてるのである。説話世界においては、サルやキツネは、人間のある特質を強調したシンボリックな存在であった。それは、動物がもつ擬人的なイメージが人間の類型に転写されたものであったから、お伽話の世界では、動物たちは「猿のサスケ」や「豚のトンペイ」というような固有名詞をもった存在として語られることはない。ならば、異類婚姻譚に登場する

動物たちもまた、他の動物説話と等しく人間存在のある特性を表象する存在だと理解するべきであろう。

(二) 婿入り譚の分類について

昔話の分類を試みた研究者は数多いが、この作業は思いのほか難しい。婚姻譚に限っても今なお多くの混乱があり、初学者の当惑は小さくはない。

異類婚姻譚の分類は当然ながら柳田国男を出発点としているが、彼の分類は蛇婿入り譚というたった一種類の説話を対象としたものであった。これに対し、関敬吾は柳田の分類を前提としながら、婚姻譚の網羅的な分類を試みた。目的と適用範囲が違うのだから、この二つの分類に整合性が成り立ちがたいのは当然であるのに、昔話研究者は久しくこの点を軽視してきた。まず、柳田と関二人の分類の問題点を整理し、本論へと進みたい。

柳田国男は「童話小考」（昭和一〇年）の中でヘビを主人公とした婿入り譚の分類を提起している。それは物語の「発端の形の相異」を基準にした、次のようなものである³⁾。

- 1 蛙報恩型（蟹の恩返しを含む）
- 2 水乞い型
- 3 芋環型（＝立聞き型）

「蛙報恩型」とは、ある男が蛇に吞まれようとしていた蛙を助けたことを物語の発端とする説話である。この男は、蛙の助命の代わりに娘を嫁にやる約束を蛇とする。末娘が蛇婿のもとへ嫁ぐことを承諾するが、父親に命を助けられた蛙が蛇を殺してしまう。「水乞い型」は、田の水

掛けにうんだ老夫に、蛇が助力の代償として娘を求めるといふ発端の物語である。三人姉妹の姉二人は拒絶し、末娘が承諾する。そして、嫁入りの途上で、猿婿は末娘の機転で川に落ち殺されてしまう。「芋環型」とは、夜毎に娘のもとに訪れる男の正体を知ろうとして、男の衣服に麻糸のついた針を刺す説話である。

今日の目からすると少し奇異に感じられるが、柳田国男は蛙報恩型を蛇婿入り譚の一類型として、重視した。それは、彼が蛇婿入り譚の系統的発展を説明しようとしたからである。すなわち、柳田は蛙報恩型から水乞い型が派生したという俗説をしりぞけ、水乞い型がもっとも古く、それに蛇皮説話が付加されて蛙報恩型が派生したという仮説を提起した。蛇皮説話とは、娘が汚い皮を被って老婆に変身しやがて長者に見いだされて幸福になるというものである。柳田によると、これと類似の説話は世界中にあるが、蛙が関わるものはないという。それゆえ蛙報恩型は、水乞い型に外国から持ち込まれた蛇皮説話が追加されて成立したものと柳田は考えたのである。

柳田国男は水乞い型と蛙報恩型の先後関係を説明することには成功した。しかし、水乞い型と芋環型の関係については、何も語っていない。この二つが先後関係にあるのか、それともまったく由来を異にし、古くから共存していたのかについて、何も言及していない。

柳田は、猿を主人公とした婿入り譚は、水乞い型の蛇婿入り譚の1、3とは縁が薄く、2の跡を踏んでいる（水乞い型が大部分である猿婿入り譚は、2の蛇婿入り譚の変形したものだ、と言うことだろう）との述べている。しかし、蛇婿譚と猿婿譚の先後関係についての柳田の見解にはなお疑問の余地がある。

(三) 関敬吾の分類

関敬吾は、婚姻譚を次の三種に分類した³⁾。

- ① 婚姻・異類聾 (譚)
- ② 婚姻・異類女房 (譚)
- ③ 婚姻・難題聾 (譚)

①と②は異類婚姻譚、③は人間同志の婚姻をあつかったもので、関は「難題婿譚」と呼んでいる。これは、頓智話のカテゴリーに属するものなので、ここでは考察の対象としない。関は、異類婚姻譚をごく常識的に異類婿と異類女房の2つに分け、それをさらに細分類している。

その細分類の基準は、「異類」の種類と話のモチーフであった。②の検討は別の機会に譲り、彼の①の分類に注目しよう。関は異類を主人公とした婿入り譚を次の九つの類型に分けた (この分類は、関が編纂した『日本昔話大成2』の目次に反映されている)。そしてさらに、一〇一をABCの三に、一〇四と一〇八をABの二つに細分した⁴⁾。

- 一〇一 A 蛇婿入・おだまき型
- B 蛇聾入・水乞型
- C 河童婿入
- 一〇二 鬼婿入
- 一〇三 猿婿入
- 一〇四 A 蛙報恩
- B 蟹報恩
- 一〇五 鴻の卵 (水乞い型の説話に鳥による蛇の殺害説話が加わったもの)
- 一〇六 犬婿入

一〇七 蜘蛛婿入

一〇八 A 蚕神と馬

 B 蚕由来

一〇九 木魂婿入

関の分類は、主人公の分類を上位に、モチーフ (話型の特色) を下位におくものである。しかし、蛇婿だけはいくつかの項目に分散している。そこでこの分類から、蛇婿入譚だけを取り出すと以下のようなになる。

- ・一〇一 A 蛇婿入・おだまき型
- B 蛇婿入・水乞い型
- ・一〇四 A 蛙報恩
- B 蟹報恩
- ・一〇五 鴻の卵

関は柳田の分類を出発点としながら、彼独自の分類を行ったことがわかる。もつとも、関の分類は異類婿譚の包括的な分類を試みたものなので、蛇婿だけを取り出すことは彼の意図に反することかも知れない。

関の分類はよく知られたものだが、また問題も多い。関は、柳田国男の見解に忠実に従い、蛇婿入を芋環型と水乞い型の二つに分けている。しかし、蛇婿入り譚における水乞い型の事例はごく少数であり、このタイプの婚姻譚の大半は猿を主人公とするものであった。少なくとも、猿婿入りの方も水乞い型とその他の二つに分けなければ整合性はない。

一〇四はA・Bどちらも恩恵の反対給付として娘との結婚を要求するものであるから、一〇一B (蛇・水乞い型) の下位類型として位置づけ

るべきものである。

関の分類は、柳田国男の分類を中途半端に取り入れたために包括的な分類としては徹底さを欠くものとなってしまった。

私は、昔話における異類婿入り譚を、芋環型、水乞い型とその他の三種にひとまず大別したい。すると、この三分類と異類の婿の種別との間には強い相関があることが明らかになる。つまり、芋環型の主人公は必ず蛇であり、水乞い型の主人公は大部分が猿だが、蛇やタニシもある。そして、この話型において、報恩型の結末を持つものは、蛇婿に限られていることである。

(三) 芋環型と水乞い型の先後関係

芋環型は、言うまでもなく記紀神話の三輪山伝承にまで遡りうる古い起源をもつ説話である。ただし、神話と昔話は針を衣につけるといふ発端を共有しているが、その結末はまったく異なる。神話では、蛇の化身である男は神として崇敬されその子たちは有力氏族の始祖となった。昔話では、蛇婿は殺害され、その子は墮胎されてしまう。

水乞い型の説話の主人公は、大部分が蛇婿と猿婿である。当然ながら、このことは二つのうちどちらかが原型でもう一方がその派生であることを示している。では蛇と猿どちらがより古いものであろうか。この点について、関は「この昔話「猿婿入り」は蛇婿入譚の強い影響を、あるいはいま一步すすんでいふならばその変化した形ではないか」と述べ、蛇婿入譚をより古いものとした。この見解は、柳田説を一步進めたものである。しかし、関の見解には疑問の余地が多い。

まず、変化の多少の問題がある。水乞い型の猿婿入譚は極めて広い分布をもつにもかかわらず変化が比較的少ない。このことは関自身が認めている⁶⁾。それに対し水乞い型の蛇婿入譚は変異が大きく、原型からの

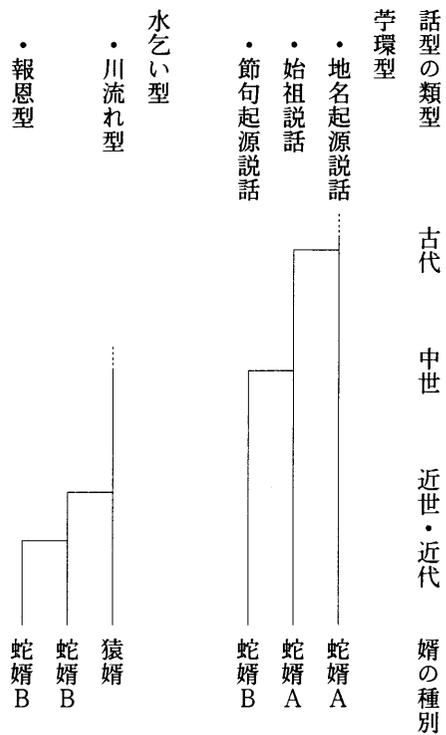
乖離の大きさを推測させる。また、この類型は「水乞い型」と称され、それゆえ水の神と同一視されていた蛇との関連が想定されてきたのだが、「水乞い」は、この説話の事件の発端としては必ずしも必須ではなかったと思われる。水乞いの代わりに、ゴボウ抜きや、畑打ちなど様々な労働が存在している。水乞いはその中のたった一つに過ぎず、これが他の様々な形の原型であるという証拠もほとんどないのである。話の発端だけが異なり話の筋はほとんど同一な説話が多数存在しているからである。

蛇は、三輪山伝承を引くまでもなく、神話世界では聖なる存在であった。それが次第に神威を失い忌み嫌われる存在へと転化して行ったというのが柳田の見解であるが、それは中世以降のことである。水乞い型に登場する蛇は、神性を失って後の新しい蛇のイメージを前提としており、とうてい古い型とは思われない。

詳しくは次の節で論じたいが、われわれは、芋環型と水乞い型の婿入り説話は先後関係にあるものではなく、まったく別に発生した異質なものであると考えたい。柳田の、蛇が水の神としての靈威を失った後に蛇殺害の説話が生まれたという主張は正しいだろうが、蛇を主人公とする水乞い型説話は、猿婿入り譚の主人公が蛇に入れ替わった結果生じたものと考えるべきである。そして、報恩型の説話は、新しく生じた蛇婿入り譚が、更に発展したものと見なすべきである。

以上の関係を図示すると図表1-1のようになるだろう。

図表1 異類婿入り譚の類型と相互関係



※「蛇婿A」は後述する美男子系婿入り譚の主人公と、「蛇婿B」は醜男系婿入り譚の主人公と一致する。

この図の、芋環型のうち、地名起源説話と始祖説話は神話・伝説の特色をもち、昔話ではない。節句起源説話の大部分は昔話だが、ごく少数の伝説も含まれる。このことから、この昔話が同型の神話・伝説を起源としていることは明らかである。それに対し、水乞い型の説話はすべて昔話である。逆に言えば、この説話は神話や伝説に由来するものではなく、純粹に昔話として成立したものであり、それゆえその起源が中世以前に遡ることはないと思われる。つまり、蛇を主人公とする水乞い型説話が猿を主人公とする説話に先行するとは考えにくいのである。

また、図表1の、蛇婿タイプAは崇敬される婿であり、蛇婿タイプBは疎まれ忌避される婿である。蛇と猿以外の婿入り話の主人公は、

いずれも忌避される婿であり、水乞い型の系統樹のいずれかの部分から分岐したものであろう。

五、婿入り説話りの二類型

柳田国男の言うように、異類婚姻譚の昔話に神話の影がさしていたことを、もちろん我々は否定しない。しかし、昔話の根底に、村の中ありふれた日常茶飯事の反映を読み取ることもまた可能である。異類婚姻譚のロマンは、人間界と隔絶した世界の物語ではなく、村の中で幾度も繰り返されてきた日常的な事件の解説として語られ、その主人公たちもまた隣人たちの誰彼になぞらえられて聞かれた場合が少なくはなかったと思われる。婿入説話を現実の人間世界の反映と考える視点に立つと、これまで民俗学者を中心になされてきたものとは別種の分析が可能になるはずである。

まず、村の未婚の女性からみた「結婚相手としての適格性」という視点にたつて、異類婚姻譚の新しい分類を試みたい。大ざっぱに言えば、これには二つの類型しかない。結婚の相手として好ましい男か、忌避すべき存在か、この二種である。聞き手の中心が子どもや若者である昔話では、構成要素を単純化・視覚化するのが原則であるから、この二つのタイプは、「容姿」という尺度によって類型化しうる。すなわち、「美男子」と「醜い男」という類型である。

この基準を用いると、各種の婿入り説話は、次の三つに分類できる。その話型と主人公の種別をあわせて掲げておく。

(一) 美男子系婿入譚：芋環型婿入譚（蛇婿のみ）

(二) 醜男系婿入譚 ……水乞型婿入譚（猿、蛇、タニシなど）、

報恩型婿入譚（蛇婿のみ）

(三) どちらでもないもの……犬婿入、馬婿入など

※水乞い型には、老父の重労働への助力（田起し、ゴボウ抜き、……）を発端とする婿入り譚をすべて含める。

ここで重要なことは、芋環型婿入譚はすべて美男子系に含まれ、水乞い型と蛙報恩型はすべて醜男系の説話であることである。そして、とりわけ大事なことは、蛇婿のほとんどが(一)に、猿婿のすべてが(二)に分類され、(二)でない蛇婿譚の水乞い型はごく少なく、その大半が報恩型であること、そして、馬と犬は、芋環型・水乞い型どちらの説話の主人公にもならない点である。このことは、犬・馬の婿入り譚は、結婚相手としての適性をテーマとした物語ではないことを意味する。

つまり、容姿を尺度として異類婿入り譚を三つに分類すると、話形と異類婿の種別は明確に分類することができ、ここからはずれる例外はほとんど存在しないのである。

芋環型の婿入譚では、村の若い娘のところへ正体不明の男が通つてくるところから物語は始まる。この男の容姿について「美男子」だと明言している昔話はそれほど多いわけではない。しかし、素性が分からないにも関わらず娘が受け入れているのだから、女性からみて好ましい男であったことは間違いない。伝説ではほとんどが「立派な男」「容姿の優れた男」としている。そして、この話形では主人公はほとんどの場合「蛇(ごく稀に竜など)」で、猿やタニシなどが婿となる話は存在していない。

それに対し水乞い型の説話では婿となるべき若者は、明らかに恋愛・結

婚の相手としての資格に欠ける存在である。このことは、三人姉妹の姉二人が彼を拒絶しているのだから疑問の余地はない。そしてこの種の異類婿は猿に始まり、タニシ、その他様々なものに及ぶ。蛇を主人公としたものも少数存在しているが、それは、柳田国男が指摘していたように、蛇が忌むべきものと考えられるようになった後の時代に生まれたものである。

六、猿婿入り譚の基本的構造と差異

醜男系の婿入譚は、水乞い型と報恩型の二つに大別される。後者は異類婿が猿から蛇に変化した後に、物語の結末が末娘による婿の殺害から蟹（時に蛙）による殺害に変形したものである。この婿入り譚の意義は別の機会に譲り、本稿では水乞い型に考察を限定したい。

猿を主人公とした水乞い型婿入り譚は広い分布をもつ説話なので、差異はきわめて多い。しかし、物語の骨格となる構造はすべて同一である。その基本的な要素と言いうるものは次の四つで、その順序も決まっている。ごく稀な例外を除いて、次の四要素とその生起の順序からはずれる猿婿入り譚は存在していない。この物語の多様性が大きいと言っても、それはこの四要素それぞれの中でのものに過ぎない。

- (一) 物語の発端：年老いた父親の重労働への異類の助力
- (二) 物語の課題：その報酬としての娘の要求
- (三) 物語の展開：姉の拒絶と末娘の承諾
- (四) 物語の結末：末娘の策略による異類婿の殺害

このうち、地域的な差異が大きいのは、物語の発端と結末、つまり一と四である。そこで、われわれは、まずこの二種の多様性について考察し、この説話の社会的な意義を解明したい。

第一の基本的要素「物語の発端」における多様性について見ると、それは「重労働」の種類に集中している。その差異は地域によって実になまじまである。しかし、柳田は「水掛け」を重視し、このタイプの説話を「水乞い型」と名付けた。柳田の後継者たちはしかたなく、老父への助力に始まる説話のすべてをこの名称で呼んでいる。初学者を混乱させる不適切きわまりない命名は、この種の昔話群を古い信仰の名残りともみならず柳田独自の視点に由来するものであった。

柳田は水乞い型の婿入り説話に「サルサワ」という言葉が散見することから、これを失われた説話の主人公の名称であると推測した。彼は、サルサワは元は「たゞの猿ではない」と指摘し「猿とよく似たサルサワ」といふ物が、「水のぬし」²⁷で、これを主人公とした説話が猿婿入り譚の前にあったはずだと言う。しかし、柳田の期待にも関わらず、彼の仮説の論拠となるようは証拠はついに見つからなかった。

婿入り説話の研究の進んだ現在では、猿婿の前身としてのサルサワの存在も、それが「水のぬし」や「水の恠」であったという柳田の仮説も受け入れる研究者はまずいと思われる。ならば、猿婿入り譚の発端を「水乞い」によって代表させようとした柳田の見解自体が不適切なものであったということになる。

異類の若者による老父の農作業への助力の裏には、その娘を嫁としてもらい受けようという若者の下心があった。ならば、その農作業は重労働であれば何でもよかったはずである。この点に注目すると、柳田国男の「水乞い型」という呼称はけっして適切なものだったとは言いがたい。私は

この説話のモチーフを反映した「嫁乞い型」という呼称を提案したい。

この物語は、結婚相手を見つけたい若者と、娘しか子どもいない家の年老いた父親との、ささやかな接触から始まった。こうした出来事は、実はつい最近までどこの農村にも常に見られるありふれたものであった。

娘ばかりで跡取り息子のいない家の行く末は、村の中では常に注目されていた。こうした家は、いずれは娘に婿をとって家を継がせなければならぬ。ならば、村の男の誰が娘の婿となってその家の家産を手に入れるか……。娘と家督、この二つの行く末をめぐって、様々な思惑が村人の頭の中で交錯したはずである。とりわけ、家産のほとんどない貧農の家の息子や、次三男、奉公人などで分家独立の可能性の低い若者たちの眼には、こうした家は願ってもない婿入り先に映ったに違いない。こうした村の事情が、この昔話には正確に反映されている。

怠け者の田子作が、よその家の畑を起こしている……。こんな光景を見て不思議に思った子どもたちも、「猿婿入り譚」のはじめの部分聞けば笑い出さずにはいられなかっただろう。そして昔話の展開に、自分たちの実際の見聞と比較しつつ、聞き入ったことであろう。つまり、この昔話は、村の中でくり返されていた男女関係の帰結の、口承文芸という形式による文学的表現であるとともに、子供たちにも分かる形で、その社会学的な分析を示すものであった。こうした視点にたてば、異類婚姻譚のきわめて人間的な側面が見えてくるのである。

若者の思惑にたいする、三人の娘たちの対応は、この視点に立てばきわめてよく理解できる。父親の軽はずみな約束に対して長女が首をたてに振らないのは、彼女が言い寄り男たちを自由に選べる立場にあるからだ。彼女は豊かな家の跡取り息子の嫁になって家督を妹に譲ってもよい、

家産の少ない家の男を好きになったら自分の家の聲に迎えばよい。彼女には「猿」のような男を結婚の相手として選ぶという選択は考えられないのである。

二番目の娘の考えも長姉と似ている。姉がよその家に嫁げば、自分が跡取り娘となって婿を選べる。姉が婿取りをして家をついで、自分には村内の同家格の豊かな家の嫁となる可能性は残されている（そこには強固な姻戚関係が形成される）。分家もできない「猿」の嫁となる選択は、次女の眼中にもない。

姉二人に対し、三女は恵まれた境遇にあるとは言えない。姉たちが結婚するまで、しばらくは待たなければならぬし、自分の番になっても残りものしか与えてはもらえないだろう。それが分かっているからこそ、末娘は猿の嫁となることを承諾するのである。三人の娘たちそれぞれのこうした選択は、たとえ幼くとも村の中に育った少女には充分理解できることであっただろう。

七、物語の結末 猿が殺害される時

物語は、末娘の機転による猿の殺害によって終わる。このエピソードにおける多様性は次の三点にみられる。

① 殺害時点

② 猿殺害の手段（持ち物の多様性を含む）

③ 河に流されて行く時、猿の歌う歌

②と③は、物語の構造に関わる相異ではない。②は、頓知話に属する部分だから、猿の殺害方法はできる限り奇抜で気の利いた手段が工夫される。多様性はその結果に過ぎない。持ち物の多様性も、聞き手の笑

いを誘うための工夫の結果である。この二つの差異は、物語の基本的な構造に基づく差異とは言えないのである。これに対し、殺される時点の相異は、物語の基本的な構造にかかわる相異である。

猿の殺害がいつ行われるかに注目すると、猿譚は次の二つの類型に分けられる。

(A) 嫁入り型：嫁入りの途上での猿殺害（婚姻成立の直前）。

(B) 里帰り型：嫁入りの後、里帰りの途中での殺害（婚姻成立の直後）。

殺害時点の相異、つまり、それが嫁入りの直前に行われたか、直後であるか、はきわめて大きな違いである。もし後者なら、父親の約束は一応形の上では守られたことになるが、前者ならまったく守られなかったことになるからだ。幼い聞き手ほど、こうした不正には敏感に反応したに違いない。にも関わらずこうした常識的には納得しがたい物語が語り継がれたのはどうしてだろうか。

この疑問に最初に注目したのは柳田国男である。彼は、「童話小考」で、末娘が婿殿に持たせた「米と臼」は餅を作るためのものであり「餅は昔から男女の契り「婚姻」の成就の験し」⁹。だったと言って、嫁入り以前における婚姻の成立を示唆している。そして、昔話でこの点がいまいにされてきたのは「暫くでも猿と同棲して居たことが、言いたくなかったから」という、奇妙な主張をしている。そして、彼は同棲の場所を「山の中」だと言う。つまり、新婚カップルの婚舎は妻方でも夫方でもなく、それは新居型の婚姻だったというのである。

柳田の「童話小考」は、猿殺害譚における婚姻の成立をいつとみなすかという重要な問題を論じながら、婚姻の二類型を混同して論じるなど極めて未整理な論考ではあるが、彼が嫁入り前の婚姻の成立（同棲段

階の存在)を認めていたことは間違いない。しかし、彼は同棲の場所を「山の中」と考えていた。この仮説に立つと、末娘による猿婿殺害の意義は明らかになりがたい。嫁入り以前に婚姻は成立していたという柳田の仮説を正しいものと認めた上で、我々はこの昔話が前提としていた婚姻形式を新居制ではなく婿の通い婚と考え、猿婿のヨバイが嫁入りに先行していたと仮定したい。

末娘と猿の婿殿の破局は、庶民の婚姻慣習が「婿入り婚」だったことを前提にしないと理解しにくい。それは、柳田国男が名作「婿入考」で明らかにした伝統的な婚姻習俗であるが、不思議なことに柳田は自分の婚姻史研究を異類婚姻譚に適用することにはきわめて消極的だった。

柳田国男の婚姻史研究^①を簡単に要約すると、近代以前の社会においては、庶民の婚姻の第一段階は夫が妻の家に通う「婿入婚」であり、数年にわたる妻方への通い婚の段階をへて、やがて「嫁入り」、すなわち夫の家への妻の引き移りが行われるというものである。「嫁入り」によって婚姻が開始される「嫁入婚」は、村の上層や武家階級のもので、庶民階層の婚姻は「婿入婚」が中心だったということを柳田国男は強調した。

このような婚姻形態が一般的だった理由について、柳田は、村の中では若い女性の労働力が貴重であったからだと指摘している。これは説得力ある説明で、家経営において、主婦権を握るオカサママは家経営全体の指揮に忙しかったから、家事や農作業の中心は若い女性だった。とりわけ養蚕や製糸・機織りなど手近な現金収入の得やすい領域において、彼女たちはそのもっとも重要な働き手であった。それゆえ、妻側の家には「稼ぎ手の娘を家の外に出したくはない、しかし婚姻の遅延も忍びがたい」という思惑が生じる。こうした事情が、婿入り婚という慣行を支

えたというのである。

もちろん、これ以外の理由もある。まず子どもの養育が妻側でなされることである。この場合、子の養育費は妻方の負担となるが、妻にとつては自分の生家で出産と子の養育ができるという利点がある。さらに、嫁入りすれば生ずるであろう嫁姑の確執をさける意義もある。地域によっては、夫の家への嫁の引き移りが、姑の隠居と主婦権の嫁への譲渡と一致していることがあるが、こうした習慣は、婿入婚の意義の一つが嫁姑間の対立の回避にあったことを示すものといえる。

さらに、柳田国男は指摘していないが、見落とせないもう一つの理由がある。それは、妻方の家に対する婿の労力提供である。若い男女の関係が二人だけの個人的了解の段階からさらに進んで双方の家が公認する段階に入ると、妻方の家を通じてきた婿に酒食を提供するようになる。しかし、妻方での饗応は、婿の労力提供と一体不可分のものである。婿として認知された後、その関係の永続を望むかぎり、男は自分の労力を可能なかぎり妻の家に提供しなければならない。つまり、妻方の家から言えば、婿入婚によって娘の貴重な労働力を手放さないとすむだけでなく、他家からのほとんど無償に近い労働力が確保できるのである。

こうした娘の家の側の思惑が、猿のぶしつけな申し出の背景にあり、末娘に猿との婚姻を受入れさせる大きな要因となったと思われる。年老いた父親のほかに男手のない家にとって、猿の提供する労働力は必須のものであったに違いないからである。末娘の承諾は家の要請に添ったものであり、孝行心というような個人的倫理の問題ではなかったと言える。猿婿入り譚の最大の謎、すなわち、嫁入りの途上での猿婿殺害の理由も、こうした前提に立つなら、自ずから明らかとなってくる。農作業における助力に対し末娘を与えたということは、猿に対し末娘へのヨバイを許

したということである。それは村の中では一応婚姻の成立ではあるが、こうした婚姻形態はかならずしも安定的・永続的とは言えない。男の側が通ってこなくなることもあれば、妻方が難癖をつけて追いつくこともありうる。

村の中では、猿と呼ばれるような夫として望まれない男の婚姻が永続することは容易ではなかった。そして、その破局は彼が妻の自分の家への引き移りを望んだ時にもっと多く発生したと思われる。妻の家の側からすれば、男の労働力提供が目的で嫁としたのであるから、娘を手放すことは本意ではない。娘にしても、家産もなく家格も低い家に行けば苦労するに違いないという気持ちは強かっただろう。親はもう少しまてば、もっと良い男を見つけてきてやると言ったかも知れない。つまり、猿の婿殿の嫁取りが完成するまでには小さくはない障害があったのである。

こうした妻側の打算が、「嫁入り時点での破局」という結果へと行き着くことは、村の日常生活の中では少なくはなかったと思われる。猿の嫁入り譚の結末は、こうした村の出来事の忠実な文学化であったと言える。つまり、この昔話は、「通い婚の破局」という村内のありふれたしかし忘れがたい事件を正確に反映した物語だったのである。

嫁入り型の猿婿入譚の破局は、「嫁入り」の前段階ですでに婿の通い婚が成立していたことを前提としていた。しかし、婿入婚から嫁入り婚への移行が終了してしまった地域では、もう嫁の引き移りの意義も猿婿殺害の理由も理解されえない。こうした地域においては、この説話の里帰り型への移行が起こったと考えられる。嫁入り婚においては、「里帰りの時の破局」が決して少なくはなく、この型の猿婿入譚が、こうした事件を説明する昔話として再生したのである。

【注】

- (1) 柳田国男「童話小考」（底本柳田国男集第八巻、筑摩書房）四七三頁
- (2) 柳田国男前掲「童話小考」四六三頁
- (3) 関敬吾『日本昔話大成』第二巻目次（角川書店、一九七八年）
- (4) 関敬吾前掲書目次
- (5) 関敬吾前掲書一〇四頁
- (6) 関敬吾前掲書一〇四頁
- (7) 柳田国男前掲「童話小考」四六二頁
- (8) 柳田国男前掲「童話小考」四五七頁
- (9) 柳田国男「婿入考」（底本柳田国男集第十五巻、筑摩書房）